

平成 28 年 3 月 16 日

能美市議会議長

米田 敏勝 様

産業経済常任委員会

委員長 南山 修一

産業経済常任委員会行政視察報告書

1. 期 間：平成 28 年 2 月 1 日(月)～ 3 日(水)
2. 視察先：福井県若狭町農村総合公園・かみなか農楽舎、京都府京丹後市役所
兵庫県豊岡市役所、豊岡市立コウノトリ文化館、京都府舞鶴ふるるファーム
3. 目 的：1) 都市からの若者の就農、定住促進（かみなか農楽舎）
2) ジビエ加工、地域おこし協力隊について（京都府京丹後市役所）
3) コウノトリツーリズム、環境創造型農業について（兵庫県豊岡市）
4) 見て、食べて、体験できるふれあい農園（舞鶴ふるるファーム）
4. 参加者：南山 修一、開道 昌信、近藤 啓子、嵐 昭夫
森 善克、田中大佐久、（随行）中西 幸一 産業建設部長

視察目的

豊岡市におけるコウノトリツーリズム、環境創造型農業、農業生産法人かみなか農楽舎の都市からの若者の就農、定住促進など、それぞれに取り組む事となった経緯、また取り組み後の成果と課題を学習し、今後能美市農政にどのように反映する事が出来るのかを考えると共に、鹿、猪の獣害への対処、これを地域資源として活用するジビエ加工の取り組みに加え、森林整備隊員、木材利用隊員といった具体的業務を謳って地域おこし協力隊を募集する京丹後市に、耕作放棄地や森林従事者の担い手不足などの農業課題の解消の見識を深め、能美市農業への参考とするべく研修視察を行った。

※コウノトリツーリズムとは、

生息環境の悪化によって一度日本の空から姿を消したコウノトリ。コウノトリの野生生息を支えるには、生きものにあふれる豊かな自然環境と、共生を受け入れるおおらかな文化環境が必要である。その最後の生息地となった豊岡市では、コウノトリの野生復帰への挑戦を続けている。

●福井県若狭町農村総合公園・かみなか農楽舎（都市からの若者の就農、定住促進）

○かみなか農楽舎の概要

かみなか農楽舎は平成 14 年に福井県若狭町役場、地元農家、民間企業が共同出資して、福井県若狭町に誕生した農業生産法人。設立当初から、都市からの若者の就農・定住を促進し地域集落を活性化する『就農・定住事業』に着手、この就農・定住事業を主軸に、農業生産（米・野菜）や加工だけでなく、農業体験事業など、多角的な農業経営に取り組んでいる。

○かみなか農楽舎が若者の就農、定住促進に取り組む理由

農業を基幹産業に発展してきた若狭町だが、耕作放棄地の増加・過疎化対策が大きな課題となってきた。こうした中で、集落住民と行政と大阪にある農業にも力を入れている民間企業の類設計室と相互に協力・出資して、「都市からの若者の就農・定住を促進し、集落を活性化する」ことを大きな目標とする（有）かみなか農楽舎を設立した。

○かみなか農楽舎の現状と役割

地域に根ざしたビジネスを興す活力と自立志向を持った人材を育成するため、地域での生産に熟知していること、研修生に対し、若狭町が持つ空気・価値観を直接伝えることが欠かせない。かみなか農楽舎では、町内外の有志を中心に編成し、これを通じて町内後継者の育成を図っている。

○かみなか農楽舎の今後

都市ネットワークづくりのため、民間企業の活力とノウハウを活用すると共に、若狭町の魅力を町外に P R する「広報施策」を同時に推進し、農業生産法人だけでは手に負えない、「サポーターの組織化」「体験学習の参加者の募集」「体験学習の運営体制づくり」「直販ネットワークづくり」等の課題に取り組んでいく。

●京都府京丹後市役所（ジビエ加工、地域おこし協力隊）

○京丹後市概要

人口 55,328 人、面積 501.46 ㎢、京都府中郡峰山町、大宮町、竹野郡網野町、丹後町、弥栄町、熊野郡久美浜町の 6 町が 2004 年 4 月 1 日合併し、市制施行して成立した

○地域おこし協力隊 経過、効果について

平成 22 年度、総務省指針により定住化を目的に地域おこし協力隊を採用。隊員自身の頑張りにより、口調始め住民に存在が認められ、共同活動も見られた。隊員が活動することにより支援員等との連携も生まれた。しかし隊員と地元との連携がうまくいかず、活動期間も一年としたため終了後の先を見据えた活動が出来ず、定住に繋がる活動、研修等も不足していた為、結局定住には至らなかった。

○地域おこし協力隊 課題、改善点、今後について

市役所職員としての位置付けであり、活動範囲に制限を受ける場合が多く、希望する活動が行えなかった。地域隊員と市と連絡調整等が細やかにできなかった。隊員派遣

期間が短く、先を見据えた活動が出来なかった。等々から、地域おこし隊員の身分を市との雇用関係は無しとする、受け入れ態勢も市担当者を一人とするのではなく、市民局(集落支援員等)グループで行う、定住化に向けた仕事をイメージした募集することにした。結果、平成 27 年度、森林整備隊員 2 名、木材利用隊員 1 名を、活動期間は 3 年とする仕事を絞った募集を行う事とした。

○ぼたん・もみじ比治の里の設立経過

京丹後市では、近年鳥獣害被害が拡大傾向にあり、有害鳥獣の捕獲を市内猟友会に委託して強力に進めていたが、平成 21 年度の捕獲実績では、猪 1,125 頭、鹿 1,094 頭で、猪は前年度と比較して約 6 割に減ったものの、逆に鹿は約 7 割増加するという状況に陥った。捕獲した猪や鹿のほとんどは埋設処理をしていたが、捕獲頭数の増加や猟友会会員の高齢化に伴い捕獲個体の処理がいよいよ大きな課題となってきた。このため、この猪や鹿肉を身近なタンパク源として活用し、観光客の誘致や地域振興を図ることを目的に平成 22 年 5 月に「京たんごぼたん・もみじ比治の里」(猪・鹿肉処理施設)を建設した。

○ぼたん・もみじ比治の里の運営・管理

木造平屋建 192.78 m²、一次処理室、二次処理室、事務室を設け、冷蔵室 2 基、冷凍室 1 基、高度排水処理槽 1 基等が設置された。総事業費 86,272 千円、うち国補助金 16,380 千円、京都府補助金 1,638 千円、過疎債 58,700 千円(約 7 割交付税措置)が充当され、一般財源は 9,554 千円である。施設の運営・管理は、社団法人京都府猟友会中郡支部猟友会に業務委託されている。

猪や鹿を解体処理し生肉に商品化した後、施設内で直売、丹後あじわいの郷や市内直売所等において販売を行っている。

○ぼたん・もみじ比治の里 安心、安全な食肉流通

処理施設は、「猪・鹿肉に係る衛生管理ガイドライン」に基づいた衛生管理を行い、猪と鹿の処理作業において同一機材を使用しない等、猪・鹿肉の安全性の確保を最優先に考えた二系列の処理設備となっており、安心、安全な食肉流通が確保されている。特に施設では、良質で安全な肉を確保するため、持ち込むことができる猪と鹿の条件は、捕獲して放血処理後 2 時間以内に施設へ搬入されるもので、捕獲記録(捕獲者、日時、場所等)が作成されている。

○ぼたん・もみじ比治の里 課題と今後

一定基準を満たし持ち込まれた鹿、猪でも、食の安全性から埋設する場合もある様である。安定供給という面では冷凍によりある程度対処出来ているが、取り扱い量的には採算面を満たすまでには至っていない。今後も猟友会と連携を取りながらの地道な運営が望まれる。

●兵庫県豊岡市役所、豊岡市立コウノトリ文化館

(コウノトリツーリズム、環境創造型農業)

○豊岡市概要

人口 81,433 人、面積 697.55 km²、日本で最後の野生コウノトリの生息地として知られ、コウノトリの保護・繁殖・共生の事業が行われている。また竹野浜などの海水浴場、神鍋高原のキャンプ場・スキー場、重伝建の出石、著名温泉地の城崎温泉があるなど観光・レジャー施設が多い。

○豊岡市環境経済戦略

環境を良くする取り組みによって経済効果が生まれ、経済効果が生まれることによって環境を良くする取り組みが活発になる。そんな相乗効果を基本に、環境と経済が共鳴する仕組みや事業を市内で増やしていこうという 5 つの柱を基本とする「豊岡市環境経済戦略」を打ち出している。

1. 豊岡型地産地消を進める
2. 豊岡型環境創造型農業を推進する
3. コウノトリツーリズムを展開する
4. 環境経済型企業の集積を進める
5. 自然エネルギーの利用を進める

○その特色ある取り組み コウノトリツーリズム

コウノトリをはじめとした多くの生きものの命を育ててきた豊岡盆地をひとつの地域文化圏にとらえ、豊かで特徴ある自然・文化・産業をエコミュージアム（地域まると博物館）と位置づけている。コウノトリ文化館は、コウノトリとともに暮らせる文化創造の拠点（エコミュージアムのコア）となっている。

○コウノトリ育む農法

平成 15 年度からおいしいお米と多様な生きものを育み、コウノトリも住める豊かな文化、地域、環境づくりを目指す「コウノトリ育む農法」減農薬栽培、無農薬栽培に取組、その耕作面積は順調に増加している。しかしそれに伴い、近年乾燥調製施設の不足やニーズの高まる無農薬栽培での除草作業労力等の課題が生じている。このため、一層の販路拡大を進める「推進事業」、乾燥調製の拠点整備や乗用除草機の導入を支援する「条件整備事業」により、コウノトリ育む農法の拡大を推進している。

●京都府舞鶴ふるるファーム（見て、食べて、体験できるふれあい農園）

○舞鶴ふるるファーム概要

舞鶴市が 2006 年 7 月に開設した農業公園。農産物等の生産・加工・販売、飲食施設の経営、加工体験施設の経営、滞在型市民農園、貸農園の経営、簡易宿泊所の経営、農林水産物の委託販売を行っている。

○地産地消への取り組み

自畑を耕し育てた農作物を販売。食事はいのちを維持する行為であり、食事と農作物、農業や作り手は連関している。ところが現代の食がとても大切である事がわかっているのにも関わらず、作り手がとても遠くに存在し隠れて見えにくくなっている。この点を踏まえふるるファームでは農と食の距離を近づけようと考え、舞鶴にあって唯一の農家に会える施設を標榜している。

●視察研修報告

若者の就農、地方定住促進については農地を持つ多くの自治体で農業施策として取り組んでいるところであります。ただ、近年水稻だけの安定経営は困難となっており、野菜、果実あるいは加工品へどう手を延ばせるかが課題となっています。その意味では「かみなか農楽舎」での研修制度卒業生40名の内、22名が地元へ就農、定住している点は成功事例といえ、その要因となっている待遇面、研修内容には学ぶべき点が多いと感じます。

現在南加賀鳥獣被害対策協議会で獣肉処理施設の整備を検討していますが、猪・鹿肉の安全性の確保を最優先に考えた二系列の処理設備を有する「ぼたん・もみじ比治の里」の視察は大いに参考となる点がありました。また採算面は注視すべきではあるが、本来的な趣旨は埋設処理を回避し自然の恵みの恩恵を受ける事にあるとの考え方は新たな側面からの提唱であり共鳴致しました。

「コウノトリ育む農法」については転換により収量が減少する点、それとその生産費用による経済波及効果が地元産の有機資材活用など県内に留まっている点、さらに二次加工品の開発、地域ブランド育成による経済効果を狙っているが、米や清酒のブランド事業は、中間投入率の低さゆえに、その効果が低い点など、課題が多い様に感じました。

とはいえ、これからの農業の課題は、生産者の労働負担を減らし、いかにブランディング力を高める、魅力ある農産物をつくるかへの取り組みであります。農産物市場での低価格化が進み、商品・サービスの質が良いことが最低限の昨今、地域ブランドを構築する上で必要なものとして、商品に対する満足から得られる「機能便益」以上に、顧客のライフスタイルや人生観に訴える「自己表現便益」の重要性が必要であります。自己表現便益の視点から見たとき無農薬、減農薬の「コウノトリ育む農法」を物語として入れ込んできた「コウノトリの舞」のブランド展開はなかなか上手く事を運んでいるようであります。

産地偽装や食品の安全性が問題視されています、当地でも温泉旅館で地元の無農薬、減農薬商品が提供され、観光客に対して温泉旅館の信頼性や安全性のアピールができる、観光と農業がタイアップし市のイメージブランドが向上する。そんな新しい農業を目指しても良いのではないかと思います。視察でした。